MYSCON10 犯人当て企画

玖乃杜モノクローム

《解答編》

by 小田牧央

目次

■解答編……四
□〔姫百合視点〕美術部／美少女探偵、登場……4
□〔花房視点〕図書班／花房の推理……5
□〔姫百合視点〕美術部／犯人の指摘……9
□〔花房視点〕図書班／スチャの正体……12
□〔姫百合視点〕美術部／動機……15
□〔花房視点〕図書班／美少女探偵の正体……17

■解答編

□［姫百合視点］美術部／美少女探偵、登場

美術室の扉を開けると、甘宮先輩と楠木先輩がいた。これが放課後なら、いつもの光景だ。でも、いまは昼休み。

「姫百合君、誰かに言われて来たの？」

楠木先輩が、少し不安そうな顔をしていた。

「隣のクラスの男子から、メモを渡されました。先輩達は？」

あの男子、名前はなんて言ったっけ？　なんだか暖かそうな名前だったのは覚えているけれど。

名前を知らない女子から、手紙を渡すよう頼まれた。そう言って、その男子は僕に折り畳んだメモ用紙を渡した。

昼休み、美術室に来てほしい。橘先生の事件について、話したいことがある——そんな内容だった。

「私達は星子ちゃんからー。知ってる？　図書班の人だけど」

黙って首を横にふった。というか、図書班ってなんだろう。

とりあえず、先輩達と同じ机に着こうとしたとき、背後で扉が開いた。

「——そろってますね」

知らない顔が、そこにあった。

セーラー服。長い黒髪。

「姫百合さん？　とりあえず、座っていただけますか」

なんだろう、この人は。

肩に届く黒髪。頭の左右に、大きな水色のリボン。それだけだと、いかにも女の子らしい格好だと思う。うちの高校ではあまりみかけない、少女趣味っぽい感じ。

それなのに、表情が冷たい。まるで肉も骨もないみたいに、人間らしさが感じられない。ソフトビニールの人形みたいだ。鏡に映せば、あっという間に偽物だとわかるんじゃないか。

「え？　あ……はい」

気圧されるようにして、僕は椅子に座った。

図書班の人だろうか。星子とかいう人？　いや、楠木先輩も甘宮先輩も、顔を見合わせている。

「あのおー」

甘宮先輩が、片手をあげて左右にふった。

「どっかで、会ったことない？　なんか、見覚えある気がするんだけど」

「いいえ」

見た目は、普通に玖乃杜の生徒だ。セーラー服に、白いスカーフ。本当に生徒なら、どこかですれちがっていてもおかしくないけど。

あれ？　白いスカーフの学年なんて、あったっけ？

□［花房視点］図書班／花房の推理

囲夫はどこへ行ったんだろうな。
第二図書室。窓側の机に座り、俺はぼんやりしていた。
廊下側の机には、未緒と湯船がいる。昼休みに俺がここに来て以来、未緒は黙々と本を読んでいた。湯船はなにやらノートを広げ、携帯電話を耳にあてて長電話だ。
俺はパンと牛乳を買ってきていた。あいつら、昼メシはいいのか？
「うーん……」
俺の向かい側、水影が伸びをした。
「ひまね」
ひまだな。
「花房君、なにか面白い話はない？」
「そうですね」
いいのか？　まあ、いいか。
あいつらはあいつらでやってるんだし。俺は俺で、やっつけちまおう。
「推理ごっこでもしてみますか」
「面白そうね」
アンパンを一口囓り、牛乳で流しこむ。
「じゃあ、まずはイタズラ者の話を……あの日の午後四時四十分、俺は囲夫に電話しました。野球部の試合が気になったんで。囲夫はスコアを見て、三対二で上級生チームが勝っていると言いました」
「花房君が手をふってたときね」
「事情聴取の後、保健室で湯船から聞いたんですがね。スコアが読めないからって囲夫が湯船に得点を訊いたんだそうです。俺が電話したときは自分でスコアを答えたってのに」
「あら、どうしてかしら」
「どうしてでしょうね。まあ、ひょっとすると俺が電話したときも、湯船に小さな声でスコアを訊いたのかもしれない。だがそもそも、いつだったか囲夫は視力が二・五だとか言ってました。そんな目のいいヤツが、なぜ湯船にスコアを訊いたのか……更に、もうひとつおかしなことがありました。電話の向こう、トランペットで校歌を練習している音が聞こえたんです。スチャの資料では、吹奏楽部の部員が体育館と特別教室棟の間にいたとありましたね」
「まあすごい。体育館を超えてグラウンドまで聞こえるなんて。すごい肺活量ね」
「二階にいた俺達には全然聞こえなかったですけどね……この二点から言えることはハッキリしてるでしょう。理由もなく視力が突然悪くなるわけがない。俺が電話したとき囲夫は、グラウンド以外の場所、トランペットの演奏が聞こえるどこかにいた。そしてグラウンドには、囲夫によく似ているが、視力が悪い誰かがいたんです」
補足すると、文庫本のこともある。
朝の電車で未緒は、表紙にセーラー服が描かれた文庫本を読んでいた。ところが放課後、図書準備室へ入った未緒は、学生服の男子が描かれた文庫本を持っていた。
携帯電話のフルブラウザで、書影を調べてみた。二冊の本は上下巻で、男子が描かれたほうが上巻だった。
朝は下巻を読んでいたのに、放課後は上巻を手にしていたわけだ。もちろん、上巻を読み直してみたくなったなんてこともあるだろうから、スコアや

トランペットの演奏ほど決定的な手がかりではないが。
「ここから結論できることは」
「双子の入れ替わりね」
顔は同じだから、制服を交換すれば入れ替わりができる。
だが、ひとつ困ったことがあった。囲夫は目がいいが、未緒は眼鏡をしている。入れ替わりの間、囲夫に変装した未緒は眼鏡をかけるわけにいかない。だから、スコアが読めなかった。
文庫本は、ケアレスミスだろう。未緒が上下巻とも持ってきていたのか、それとも図書室にあったのか。とにかく囲夫は準備室に入るとき、うっかり間違えて上巻を選んでしまった。もしかすると、ヒントのつもりでわざと上巻を選んだのかもしれんが。
事件当日の朝、通学電車で囲夫はスポーツバッグを肩にかけていた。体育の授業は無かったから、体操着を詰めていたわけじゃない。入れ替わりのための着替えなんかが入っていたんだろう。

ところが、双子の入れ替わりを前提にすると、おかしなことがある。
「おかしなこと？」
「二人は、いつ入れ替わったのかってことです」
顔は似ていても、声は男女だからごまかせない。
水影先輩との話が終わった午後四時半、少しだけではあるが声を聞いた。先生の用事は済んだかという水影の問いに、未緒は「はい、すみました」と返事をしていた。だから、そのときの未緒は未緒で間違いない。
午後四時四十分、携帯電話でスコアを聞いたときには入れ替わっていた。従って、その後で図書準備室に入ったのは未緒に変装した囲夫だろう。
ところが、野球部員らの証言によれば、囲夫はずっとグラウンドにいた。一度だけトイレのため特別教室棟に戻ったが、それは午後五時過ぎだったという。
時間があわない。
「ここでどうやら、イタズラ好きがもう一人いたと気づきました」
「あら、誰かしら？」
手の平に顎をのせ、澄ました笑顔。
「南棟の三階で俺が目を覚ましたとき、ケータイの時計が午後四時一分を差してました。で、先輩と一緒に図書室へ行った。パソコンのことを教えてもらった後、チャイムが鳴ったの覚えてます？」
「ウーン、そうね。鳴った気もするかな」
「暗黒史を見せてもらった後、宿題をやり始めたとき、四時半でした。つまりチャイムは、午後四時から四時半の間に鳴ったことになります」
「そうね」
「でも、それはおかしい」
「どうして？」
「鳴るわけがないんですよ。その時間帯、チャイムが鳴るわけがない」
玖乃杜高校では、補習授業のため七限目と八限目にもチャイムが鳴る。午後五時半が、八限目の終わりだ。
授業は五十分単位、そして十分の休み時間。逆算すればすぐわかる。七限目が午後三時四十分から四時半。八限目が四時四十分から五時半。
午後四時から四時半の間に、チャイムは鳴らない。
「考えられる可能性はひとつだけ。俺のケータイは、時刻表示がずらされていた。なら、ずらされたのいつか？　そしていつ戻されたのか？」
あの日、俺は二回だけ携帯電話を手放した。

南棟で昼寝をしていたとき。携帯電話が押し潰れないよう、内ポケットからだしていた。水影はそのとき、時刻の設定をいじったんだろう。

午後五時半前、未緒が話しかけてきたとき、水影に頼まれ携帯電話を貸した。時刻を元に戻したのは、そのときだ。

「あのとき、未緒の様子はどうもおかしかった。話しかけるネタがないのに、無理に話しかけようとしている雰囲気だった」

「私が未緒さんに頼んだってことね？」

「借りたり返したりするとき、時刻表示を確かめられるとまずいですからね。未緒は俺の気をそらせるおとりだった」

ん？　俺、未緒のこと呼び捨てにしてるな。

そっと廊下側の机をうかがう。大丈夫、席を外していたようだ。

……ていうか、湯船もいない。どこ行ったんだ？

「じゃあ、どれだけずらされていたのか。時間の関係からして、パソコンの説明を受けた後に鳴ったのは八時限目の開始、午後四時四十分のチャイムだ。てことは、俺が目を覚ましたのは四時ではなく、四時半。時計は三十分だけ早められていたわけです」

アンパンの、最後の一口を放りこむ。

「時計をずらしのは、アドリブだったんですか？」

「どうしてそう思うの？」

「いろいろ、ハプニングがあったみたいですから」

未緒は、教師に用事を頼まれ、図書室に来るのが遅れた。恐らく、それで時間つぶしに囲夫と湯船はバドミントンの誘いにのった。

ところが、今度は殿村にみつかり、説教が始まってしまった。結果的に水影は、南棟でずっと待たされることになった。

「で、放置されてる俺のケータイを見て、イタズラを思いついたのかな、と」

「想像にお任せするわ。続けて」

目の前にある、いまにも吹きだしそうな顔を見れば、答えは決まったようなもんだがな。

「こう考えると、さっき問題になった時間の矛盾も解消する。午後五時過ぎ、グラウンド脇にいた囲夫はトイレを口実に特別教室棟へ戻った。そして、未緒と入れ替わった。囲夫に変装した未緒は、外へ行き湯船と一緒に野球観戦。午後四時四十分ではなく五時十分、未緒に変装した囲夫は、どこかで俺からの電話を受けた」

「スコアを訊いたときの電話ね。でも、それだとおかしくないかしら？　花房君が窓から手をふったとき、ちゃんとグラウンドの囲夫君と湯船君は手を振り返したんでしょう？」

「どこかの誰かが、教えたんでしょうね。俺が話してるのを横で聞いて、外の未緒か湯船にケータイで知らせたんでしょう」

はにかむような笑顔で、水影はなにも答えない。

俺が囲夫との話を終えたとき、水影も同時に通話を終えて、携帯電話を机の上に置くところだった。

「どこでなにしてたか知りませんが、それから囲夫は図書室へやってきた。文庫本をぶらさげて、未緒に変装したまま図書準備室に入った」

そして午後五時半前、野球の試合が終わった。ここで未緒と囲夫は変装をとき、元の姿に戻った。着替えはトイレか、図書室の書架の奥ってとこか。

それから未緒は俺に話しかけた。水影が携帯電話の時刻表示を戻し、そこへ囲夫と湯船が戻ってくる。

なにからなにまで、憎たらしいばかりの連係プレイだ。

ややこしい話ねえ。楽しそうに水影は微笑んでいる。
「まったくですよ。これを見てください」
生徒手帳のメモ欄を示す。
貴重な十分間の休み時間に、書き直したタイムスケジュール**（巻末「行動表」参照）**だ。
フンフンと、楽しそうに水影はそれを眺めた。
「それで？」
「なんですか？」
「この労作から、花房君はなにがわかったの？」
「先輩のほうに、なにかご意見は？」
「ぜんっぜん。さっぱり。なんっにもわかんない」
俺は、苦笑いしながらストローに口をつけた。
とっくに空になっていたそれは、プヒッと変な音を立てた。
「まず、未緒が最有力容疑者から外れます」
「それはよかったわ。でも、どうして？」
「俺と先輩のアリバイがなくなるんでね。俺が目覚めたのは午後四時じゃなく、四時半。死亡推定時刻に俺は寝ていたし、それを眺めてるだけで起こそうとしなかった先輩にも、アリバイがない」
「あら大変」
「他のヤツらは大丈夫ですけどね。ていうか、むしろアリバイが強固になる」
初めは、美術部員の甘宮や楠木にも、犯行が可能なように思えた。
甘宮はバドミントンが説教で終わった後、図書室へ来て水影と会話したり、美術室へ戻ってくるまでの時間に間隙がある。楠木は、何度か美術準備室に入ったという。バドミントンの間はともかく、美術準備室の廊下側の入口からでれば、姫百合に知られずに理科準備室へ行けたはずだ。
しかし、時間のズレを見直すと、話は変わる。南棟で俺が目を覚ましたのは午後四時ではなく四時半だった。水影と特別教室棟へ移動しようとしたとき、階段の踊り場から殿村に説教を受けている囲夫達が見えた。
「つまり、囲夫、湯船、甘宮先輩は死亡推定時刻の間ずっとバドミントンをしていた。おまけに、美術部の楠木や姫百合が外にでてこなかったと証言している。五人もの容疑者が、おたがいにアリバイを確かめてるってことです」
「残念。私達だけ、仲間はずれになっちゃったのね」
「ここまで状況を整理すると、次に、思いっきり頭の痛い問題がみつかります」
「問題。まだ問題があるのね」
「ええ、それもとびきりの難問が。さっきも言いましたが、午後五時十分、試合の状況が気になった俺は、囲夫にケータイでスコアを訊きました。ところでこの時間、囲夫は未緒と入れ替わっていたはずです。といっても、入れ替わりはできても声まではごまかせませんから、電話の相手は間違いなく囲夫だったはずです」
そのき、囲夫はどこにいたのか？　トランペットの演奏が聞こえた。だから、特別教室棟の中だ。外にいたら他の生徒にみつかっただろう。
電話で、囲夫はスコアを見て得点を答えた。当然、スコアボードが見える場所にいたはずだ。
特別教室棟で、スコアボードが見える部屋。それは、理科準備室しかない。
「午後五時十分、囲夫は理科準備室にいた。これはもう、間違いない」
「そうね、そう考えるしかなさそう」

「ところが、それだとおかしなことになる」
「理科準備室は、鍵が閉まっていたのね」
「そう……他ならぬ俺が、それを確認しています。南棟から先輩と一緒に図書室へ移動するとき、理科準備室は確かに施錠されていた」
「橘先生が、ちょっと席を外したときに用心でかけただけじゃない？」
「いや、施錠を目撃したのは午後四時半過ぎ。死亡推定時刻より後ですよ。橘は、すでに理科準備室で死体になっていた。となれば、施錠したのは犯人です」
「密室ね」
「そうです。逆密室ですね。ロッカーの南京錠なら、囲夫が持ってきたんだから、スペアキーを疑うこともできる。でもこっちは、学校の鍵だ。鍵を持ってないはずの囲夫が、どうやって施錠された理科準備室に忍び込むことができたのか？」
「こっそり鍵を持ちだして、どこかのお店でコピーを作ってもらったなんてどう？」
「じゃあ、仮にそれを認めましょう。でも、まだ別の問題があるんですよ。囲夫はスコアを見るため窓際に近づいたはずなんだ。その時刻、準備室には橘の死体があった。血に弱い囲夫が、どうして気を失わなかったのか？」
「血に弱いのは心理的なものだし、なんとか頑張ったんじゃない？」
「二回も失神してますけどね。しかも、二回目は凶器についた少量の血で」
「ウーン、そうねえ……」
「いわば、二重の逆密室ってわけです。囲夫が理科準備室に入ったことは間違いない。でもそこには、南京錠という物理的な壁と、血に弱いという心理的な壁があった。囲夫は、それをどう克服したのか？」
「二重の逆密室――いいわね、いい響きね」
軽く腕組みをし、ぞくぞくしてきたとばかりに水影は震えてみせた。変態だ。
「正直、ここで少し悩みました。でも、肝心なことを忘れてましたよ」
「なあに？」
囲夫が、大馬鹿野郎ってことをですよ。

□［姫百合視点］美術部／犯人の指摘

ここまではいい？
名前も学年もわからない女生徒が、僕のほうを見た。
「エートですね……」
なにか、言ったほうがいいな。楠木先輩は押し黙ってるし、甘宮先輩は……瞳を輝かせてる。いまにも「私も図書班に入る！」とか言いだしかねない顔だ。
双子の入れ替わり。携帯電話の時刻の改ざん。二重の逆密室。なんだかもう、現実にそんなバカなことする人達がいるってのが、そもそも信じられないのだけど。
「あの、とりあえず、僕らはあなたのこと、なんて呼べばいいですか？　ていうか、何者なんですか？」
「初めの質問については」
まっすぐ、人差し指を垂直に立てる。
「そうですね、山田花子とでもしましょうか」

「いや、本名を名乗ってくださいよ」
「では……花水木迷子で」
「わかりました。それじゃあ、花水木さん」
「美少女探偵、花水木迷子！」
「……」
響きがいまいちだからだろうか。花水木さんは、しきりに首を傾げた。
「ごめんなさい、やっぱり山田で」
「エート、身分のほうについては？」
「美少女探偵」
「……」
おなかすいたなあ。
お昼ご飯が食べたいなあ。
「じゃあ、山田さん」
「いま、いろいろスルーしましたね」
「さっきから、なんのためにこんな話をしてるんですか？　双子の入れ替わりとか、密室とか、確かに図書班の人達が下でそういうことをしてたかもしれないですよ。でも、どちらにしろ僕ら美術部員はみんなアリバイがあるわけですから、橘先生の事件には関係しないじゃないですか」
「ええ、ここまでの話はそうでした。ですが、ここからは違います。いよいよ、本論です。寒桜囲夫は、どうやって二重の逆密室を突破したのか？　いま、ここに真実の扉を開けてみせましょう――」
ぷるるるるるる。着信音がした。
「失礼」
山田さんが、携帯電話を手にとった。教室の隅っこに行って、長々と会話。なにやら、状況報告をしているらしい。
「失礼しました。もう！　上司がうるさくて！」
「どうでもいいのでサッサと片付けてください……」
力を失ってる僕に、山田さんが両手をあげてオーマイガッと言った。
「ではさっそく、逆密室の謎について。鍵は、職員室で管理されていました。ここから盗んだり、コピーを作った形跡はみつかってません。では、犯人が囲夫に渡した？　死体が中にあるのに、そんなバカなことはしないでしょう」
イー、と山田さんは前歯を剥きだしてみせた。
「そもそも六限目の後、囲夫は花房に手伝わせ、わざわざ施錠をさせてます。ちゃんと鍵をかけたか、しつこく確認しています。それにもかかわらず、囲夫は理科準備室に侵入できた……つまり囲夫は、南京錠で施錠をされても、それをなんなく解錠できるトリックを、初めから用意していたと推測できます」
わけがわからない。僕は溜息をついた。
「そんな凄いトリックがあるなら、南京錠なんて意味がないじゃないですか。誰でも簡単に泥棒名人ですよ」
「いいえ、これはある条件を満たすときだけ使える、応用性の低いトリックです」
「条件？　なんですか？」
「二つあります。ひとつ、目的の南京錠と、よく似た南京錠を自前で用意できること。ふたつ、目的の南京錠が、しばらく解錠されないこと。みっつ、南京錠のほうの監視が緩いこと」
あ、三つでした。山田さんが自分でつっこんだ。と同時に、楠木先輩がハッと顔を起こした。

「南京錠のすりかえ……」
「その通り！　ブラボ！」
パチパチ。無表情の山田さんが、一人で拍手。
少し遅れて甘宮先輩が拍手。
「あの……すみません、意味がわからないです」
僕はそっと手を挙げた。
少し遅れて甘宮先輩が挙手。
「難しくはありません。そのままの意味です」
握り拳を口元にあて、山田さんはこほんと咳払いした。
「囲夫の家には、学校のと似た南京錠が複数ありました。そのうちの一個を、六時限目の終わり、理科準備室の本来の南京錠とすりかえたのです。南京錠はフックにかかってるだけですから、誰でも手にとれたでしょう」
「はあ」
「花房は、そんなこととはつゆしらず。理科準備室の南京錠だと思いこんで施錠しました。南京錠なので、施錠に鍵は要りません」
「はあ」
「さて、放課後。未緒に変装した囲夫が、理科準備室にやってきます。そこにかかっている南京錠は囲夫が自宅から持ってきたほうです。当然、囲夫は鍵を持っています。これで、逆密室破れたり」
「はあ」
「もちろん、そのままにしては翌日、理科準備室の鍵とあわなくて橘先生にバレてしまいます。囲夫は六時限目に盗んでおいた、理科準備室の本来の南京錠をとりだし、施錠します。家から持ってきたほうの南京錠は用済みなので、持ち帰ります」
「はあ」
「これで終わりです」
「はあ……」
あれ？　なんだか、スゴクあっさり解決したような。
「さて、ここでひとつ、考えないといけないことがあります。橘先生は、季節外れのインフルエンザで休みのはずでした。ところが実際は、思いがけず回復した先生が登校してしまいました。理科準備室を開けようとした橘先生は、どんな目に遭うでしょう？」
「……鍵が、開かない」
六時限目が終わった後、囲夫という生徒が南京錠を交換した。
放課後、橘先生が職員室で鍵を借りて、理科準備室にやってきたとき、そこにかかっていた南京錠は本来の錠ではなかった。
だから、開かない。開けられない。
「橘先生は、どうしたでしょうか。困った、鍵が開かない。壊れたのか。しかたないな……職員室へ鍵を返しに来ることもなく、橘先生はどうしたのか？」
「他の部屋へ……行った」
「でしょうね。つまり、殺害現場は理科準備室ではなかった。午後五時十分頃、囲夫が忍びこんで南京錠を戻すまで、理科準備室は密室でした。理科準備室は囲夫にとって密室だったのではなく、囲夫以外の者にこそ密室だった。橘先生は他の場所で殺され、午後五時十分以降に死体が運びこまれた」
くい、と山田さんが首をひねった。肩が凝ったとでも言わんばかりに。
「これによって、自動的に第二の密室も消え失せます。囲夫が流血を目にして失神する恐れなんて無かった。初めから、そこに死体なんて無かったんですから。もはや問題なのは、次の疑問です。理科準備室に入れなかった橘先

生は、どの部屋に行ったのでしょう？」
「……図書準備室？」
「そうですね。顧問ですし、二階のほうが近いですものね。鍵が開かず、橘先生は少し迷ってから二階へ行った、としましょう。図書室に一人でいたのは、寒桜未緒。なにがあったのか知りませんが、未緒は橘先生を殺害」
「そして死体を図書準備室に隠して……」
ダメだ。
午後五時十分から、六時に死体がみつかるまで、図書室には花房や水影がいた。図書準備室に死体を隠していたとしても、理科準備室へ運ぶ隙が無い。
「ほ、本棚の奥とか、トイレとか……」
「隠すのは死体ですよ？　そんな、誰かがフラリと来るところへ隠しますか？」
「で、でも……」
そうだとすると。
残った場所は、ひとつしかない。
「私がここへ来た理由は、もうおわかりですね？」
人形のように瞳を動かさず。
山田さんは、まっすぐ僕をみつめた。
「死亡推定時刻、午後四時から四時半の間。美術準備室に入ったのはどなたですか？」
わたしです。
楠木先輩が言った。

□［花房視点］図書班／スチャの正体

とゆうわけで。
犯人は、楠木亜里砂です。
牛乳パックをつぶしながら俺は水影に言った。
「それはいいけれど、花房君」
「なんですか」
「もう少し、かっこよく言えない？」
スチャの資料によると、午後五時半過ぎ、美術部員の甘宮と姫百合だけ先に帰っている。残された楠木は、一人でゆっくりと美術準備室から理科準備室へ死体を運ぶことが可能だった。
死体を運んだ方法はよくわからない。まさか、成人男性を背負っていったとは考えにくい。でかい布で包んでひきずったのか、いっそソリでもあれば楽だったろうが。まさか、美術準備室にそんなものはないか。
死後一時間から二時間というと、手足の死後硬直はそれほど始まっていない。死斑も、身体の向きが変わると出現位置が移動する。
ただ、現代の検屍技術なら、少しは死体が移動した可能性を疑われてそうなもんだ。スチャのヤツ、推理しにくいように省略したんじゃないだろうな。
「どうも、一度も会ったことがない上級生を、犯人呼ばわりするってのがしっくりこないんですよね。現実味がないというか」
つぶして小さくした牛乳パックをもてあそぶ。
動機もさっぱりわからんしな。そもそも、なんで橘は三階まで行ったんだ？
「まあ、犯人としての楠木の行動は妥当なところです。死体が美術準備室でみつかれば、あっという間に自分が犯人だとわかっちまう。どうにかしなければと焦った楠木は、橘のポケットから理科準備室の鍵をみつけた」

入口を南京錠で施錠したのは、少しでも発見を遅らせるためだろう。痕跡は風化する。遅れたほうが、証言者の記憶があいまいになって好都合だ。
死体を窓際へ運んだのも同じ理由だ。扉の上部にはガラスが嵌っている。磨りガラスとはいえ、ぼんやりとはわかるから、死体が転がっていれば気づかれる恐れがあった。
そして、書類鞄。いかにも理科準備室で殺されたように、適当に書類を広げ、仕事中だったようにみせかけた。
「フーン。花房君の推理は、これで終わり？」
水影が、小さく首を傾げる。
「まさか」
俺は、鼻で笑った。
「肝心なのが残ってるじゃないですか」
そもそも囲夫は、なんのため理科準備室へ忍び込んだのか。
そして、スチャは誰なのか。
楠木は、囲夫の行動には気づいてなかっただろう。
気づいていたら、理科準備室以外の場所へ死体を運んだはずだ。危険を冒してでも、特別教室棟の外へ運んだかもしれない。
死体が理科準備室で発見されることは、むしろ死体がどこか別の場所から運ばれたことを意味してしまうのだから。
「ロッカーは俺が南京錠で施錠しました。だが、囲夫なら理科準備室と同じトリックで破れます」
午後五時過ぎ、囲夫は未緒と入れ替わった後、理科準備室に忍び込んだ。午後五時十分、思いがけず俺から電話がかかってきたので、窓辺によってグラウンドのスコアボードを確認し、得点を俺に教えた。そして写真立てを盗みだし、図書準備室へ未緒の格好のまま入ると、ロッカーに写真立てを収めた。
「それが、囲夫のたくらんでいた悪ふざけだったわけですよ。理科準備室は俺が施錠した。ロッカーも俺が施錠した。ところが、理科準備室から写真立てが盗まれ、それがロッカーのほうから発見された。さあ、どうやってこの不可能犯罪をなしとげたのかってわけです」
こう考えると、下駄箱にあった挑戦状も意味がわかる。あれは、俺からなにか盗むという意味ではなかった。理科準備室から写真立てが盗まれ、最後に施錠した俺が犯人として疑われることになるだろうという予告だった。
囲夫のやつ、忍び笑いしながら作ったんだろうなあ。
「では、木槌はどうか？　ロッカーと違って、こっちは鍵がいらない。楠木が橘を殺害した後に持ち込んだのか？」
それは、ありえない。
事件の翌朝、ボイスチェンジャーで話しかけてきたスチャは、ロッカーに写真立てがあることも、引き出しに木槌があることも、どちらも知っていた。
しかし楠木は、囲夫の悪だくみに気づいていなかった。ロッカーに写真立てがあることを知らなかったはずだ。
「殺害現場は理科準備室だと偽装したかった楠木は、死体と一緒に木槌を置いてきたはずです。ところが、いつの間にかそれは消えていた……」
水影が、ニンマリ笑っている。
唇の端をあげて、ひきつるように。
「殺害現場は美術準備室、そして午後五時半に楠木が一人になるまで、凶器はどこにも持ちだせなかった。言い替えれば、図書準備室へ凶器が持ち込ま

れたのは、五時半以降でなければならない。五時半以降、理科準備室から木槌をもちだし、かつ図書準備室へ持ち込む機会のあった人物」
用務員の宇美音さんが、職員室へ知らせに行った。
囲夫が失神し、湯船が保健室へ運んだ。
俺と未緒は、特別教室棟に誰か残っているヤツがいないか見て回った。
そして水影はひとりきり、理科準備室の見張り番をしていた。
「先輩、さしつかえなければ教えてください」
顔を低くし、上目づかいで水影の顔を見る。
「職員室から教師達が来て、見張りが不要になった後。保健室へ来るまでの間、先輩はなにをしてました?」
貼りつけたような笑顔のまま。水影は、沈黙している。
「ていうか」
俺は肩をすくめた。
「名前が安直すぎるぞ。スター・チャイルド先輩」
顔を机に伏せて。
水影が笑いだした。
やっと顔をあげた水影は、目頭を拭った。
そんな、涙がこぼれるほど笑わんでも。
「うん、安直だった。そろそろ別の名前にしようかな」
「スチャ」
膝の上で、軽く指を組み合わせる。
「おまえが、ケータイの時計をいじった気持ちはわかる」
「ごめんね」
「囲夫の悪だくみにのったことも」
「面白かったでしょ?」
「凶器を盗んだことは……犯罪だ。社会的には許されない。だが、俺は共感できる。同じ立場なら、俺だってやったかもしれない」
むしろ、俺のほうがやりかねない。橘とのつきあいはほとんど無かったから。
だが、水影はやった。顧問教師として、それなりに会話もあっただろうに。その死体を前にして、それをやった。
「ホント、あのときは頭の中、真っ白になった」
瞳をうるませ、水影はあらぬ方向をみつめている。
「ううん、違う。火花がいくつも飛んで、まぶしくて目を開けられない感じ。本当の殺人事件に、私、関われるんだって——」
ここが、違う。
水影と俺は……ここが、決定的に違う。
絶望的なくらい深い谷間があって、俺も水影も、たがいにそれを渡ることができない。飛び越えることができない。
それでも——。
「だがな」
低く、喉から声を、押しだす。
「囲夫を傷つけたことは、許せない」
スチャが、俺のほうを向いた。
「図書室へ二人以上で行けってのは、俺が自作自演したと疑われないようにするためだな? だが、俺が囲夫と一緒に行くことは予想がついたはずだ。死体を発見して囲夫が気絶したとき、おまえは一緒だった。囲夫が血に弱いことを既に知っていたはずだ」

「えっと、だって」
きょどきょどと、視線をまどわせる。
「あのときは死体だったし――凶器についた血くらいなら、大丈夫かなあって……」
「それが、おまえの間違っているところだ。悪だくみの楽しさに目がくらんで、別の大事なことを忘れる」
指が痛い。
膝の上、指に力をこめすぎていた。ああ、俺は怒ってるんだな、と自覚する。
「二度とするな」
しょんぼりと目を伏せ、それから、スチャは上目遣いに俺を見上げた。
「だれもきずつけないなんて、むりだよ？」
あどけない笑み。
いたずらっ子のような、微笑み。
「俺を傷つけろ」
指を解く。
力を抜いて。
「俺は、それを楽しめるから。だから――頼む、反省してくれ」
虚を突かれたように、スチャは表情を変えた。
唇を閉じ、じっと俺を見上げた。
「ごめんなさい」
つぶやくようにそう言って、水影は深く頭を下げた。そして小さく、つけたした。
ありがとう、と。

□［姫百合視点］美術部／動機

長い沈黙を破ったのは、山田さんだった。
「じゃ、私は」
胸の前で、腕をクロス。
「これにて失礼。美少女探偵！」
ババーン。歌舞伎みたいなポーズ。
「山田花子でした！」
なんか、しっくりこない。
一瞬そんな感じで首を傾げてから、入口のほうへ山田さんはダーッと駆けていくと、扉を開けて姿を消した。
おや？　廊下にいるのは、僕にメモを手渡した男子のような。
「亜里砂ちゃん……？」
声に、振り返る。
楠木先輩が、うつろな顔をしていた。
「ごめんなさい」
「ほんと？　ほんとなの？」
「……」
「どうして――橘先生に、なにかされた？」
甘宮先輩が、急に立ち上がった。楠木先輩の背中に手を置く。
「違う。橘先生は、なにもしてない。私が一方的に悪いの」
「そんなこと、あるわけないよ！　亜里砂ちゃんがそんなことするわけないじゃない！」
楠木先輩が、顔をあげて、なにか言いかけた。それから視線を落とし、手首の内側に目を落とした。

「お昼、食べそこねちゃった」
なんでもないような笑顔を見せながら、立ち上がる。本当に、なにも無かったかのように、いつもの顔で。
「放課後、またお話しましょ。ね？」
短い沈黙があった。
甘宮先輩が、怒ったように顔を背けた。
「先輩、待ってください……もしかして、写真ですか？」
いろんなことが、頭の中に押し寄せていた。
おソメさんの墓参りの日、宮地先生はメイクをきめて早めに帰った。そして同じ日、橘先生は風邪で休んでいたという。
もしかすると、宮地先生は見舞いにいったのかもしれない。そして翌日、学校を休んだ。たぶん、橘先生に風邪をうつされて。
美術準備室にあるインスタントコーヒー。宮地先生も、先輩達も、誰も飲んでいるのをみかけなかった。それなのに量が減っていた。あれを飲んでいたのは多分、橘先生だったんだ。つまり、橘先生はときどき美術準備室に来ていた。
だから、理科準備室の鍵が開かないとわかったとき。
（ここに来た……ここに来て……それから？）
コーヒーを飲もうとした。けど、インスタントコーヒーはほとんど無くなっていた。だから探した。買い置きでもないだろうかと、橘先生は美術準備室のあちこちを探した。
そして、みつけたんだ。なにかを。
でも、なにを？
「ポラロイドカメラのフィルムが、無くなってました。先輩、なにか撮ったんですね？　それを準備室に隠していて……」
僕は、言葉をとめた。
楠木先輩がうなずいたからではなく。
甘宮先輩が、青冷めたから。
「あの写真？」
「ちがう、杏。あなたのせいじゃない」
「おソメさんの写真？」
唇に手をあてて、甘宮先輩がふるえている。
おソメさん？　そんな、子犬の写真なんかで。
「もしかして……」
僕の言葉なんて、先輩達の耳にはもう届いてないみたいだった。泣きだした甘宮先輩に、そっと楠木先輩が声をかけ、肩を抱いている。
「写真って、死んだおソメさんの？　おソメさんの、死体を……」
雨の中。
おソメさんの亡骸を抱いて。
立ち尽くしている楠木先輩。
それをみつめる、甘宮先輩。
「捨てられなかった」
楠木先輩が、僕のほうを向いた。
「杏の作品、捨てられなかった。こわいのに、きれいだった」
宮地先生はなんて言ってた？
花見のとき、フィルムを無駄遣いした甘宮先輩を、なんて叱った？
「理解されないと思った。あのときの橘先生の――私を見る目」
ずっと思い出に残したくなるような。

そういう大切なときまで、使っちゃダメ。
「姫百合君……おねがい、もう行って」
僕はいま、どんな顔をしてるんだろう？
甘宮先輩の泣き声に背を向けて、僕は美術室をでた。

□［花房視点］図書班／美少女探偵の正体

なにやってるんだ。あいつらは。
もうすぐ昼休みが終わる。しかし、囲夫達は戻ってこない。
ひょっとして、三階か？
囲夫にしてみれば、犯人が誰かなんて推理は朝飯前だ。スチャからの情報があれば、すぐに絞りこめる。ひょとすると、美術準備室で物的証拠を探しているのかもしれない。
「おっ」
廊下へでたところで、思わず声をあげた。未緒がこちらへ歩いてきたところだった。キョトンとした表情で、俺を見返す。
「囲夫は、どうしたんだ？」
そのときだった。
階段のほう、誰かが降りてきた。
一人は湯船。もう一人は――。
「は……？」
三月、合格発表の日。

あの青いワンピースの少女がいた。マルチーズをこわがって歩道を遠回りした女子が、なぜかセーラー制服を着ている。それだけじゃない。胸元にあるのは。
（白い……スカーフ？）
美少女探偵？
頭の中がごちゃごちゃになる。ワンピースの少女は、未緒じゃなかったのか？　いや、未緒はここにいる。俺の目の前にいる。ほら、俺のすぐそばに。
すぐそばで、ゆっくり手を左右に広げて。
俺を抱きしめている。
「み、みお、さん？」
硬直。
「ななな、なにをなさっておいでで？」
いや、待て、そうか、これは。
やばい。
「うふ」
俺を抱きしめている男が、吹きだした。
「うふひははははは！」
「な、なにやってんのよ！」
美少女探偵が、飛んでくる。
文字通りの意味で。ジャンプして、ボディアタック。肘が俺の顔にクリティカルヒット。
ウィッグが外れ、憤怒している未緒の顔が現れた。
（そりゃそうだよな……）
囲夫が変装しても、声で男とバレる。そこをなんとかごまかせても、甘宮

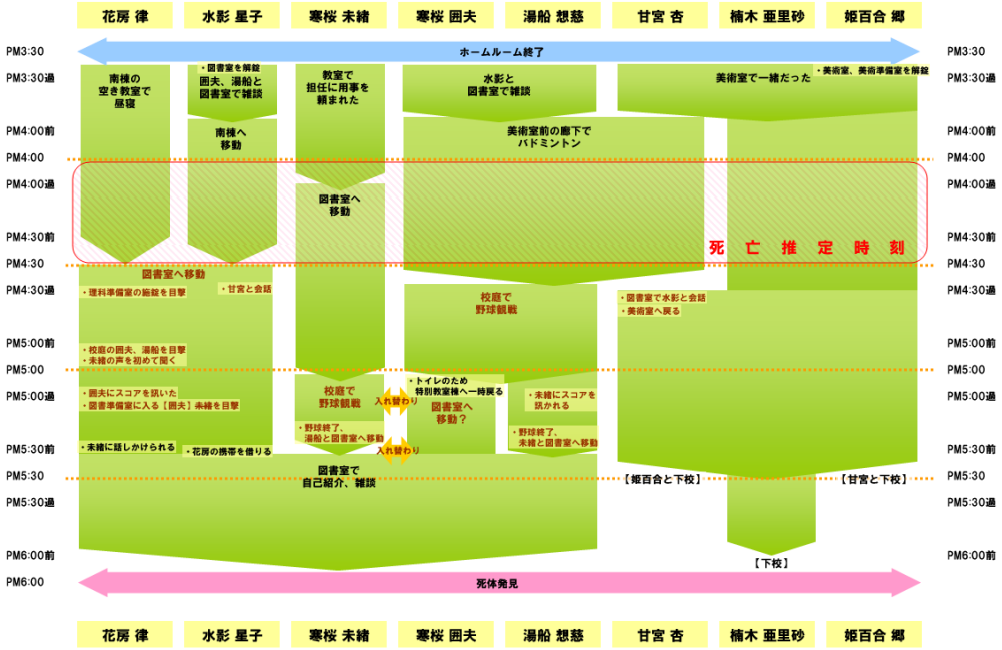
先輩とはバドミントンで顔を合わせてる。美少女探偵をやるとしたら、未緒しかいない。
「おまえら……なにをしてたんだ？」
「ん？　いや、図書班がつぶれちゃうなら、伝説だけでも作っておこっかなって」
のほほんとした顔で俺たちを眺めてる湯船。そうか、さっきの長電話は、携帯電話で未緒に謎解き役のサポートをしてたのか。
「わかった。美少女探偵のほうはいい。で、おまえが未緒に変装してる理由はなんだ」
「どうでもいいから！　アンタ達、さっさと離れなさいっ！」
囲夫が、ウィンクした。
顔を真っ赤にした未緒が、後ろから囲夫をひっぺがそうとしている。
うん。そうだな。
おまえたちのやることに、意味なんてないわな。

〈了〉

玖乃杜モノクローム

※真相に触れています！ 閲覧注意！

【解答編】行動表



玖乃杜モノクローム《解答編》

平成二十一年五月二十三日　初版　発行

著　者　小田牧央（おだまきお）